

生で、それだけに永井先生とは善い意味の対立講座になつて私どもには比較研究の方法を体得するによい機会が恵まれた。尾上先生からは「古今」「新古今」を、岡田先生からは「万葉集」を習つたのだが、この岡田先生の「万葉集」がまた文法に立脚した解説であつて、全く先生は文法学に徹した方だつた。佐々先生には本科の一年になつて、「古今集」を習ひかけたばかりで、急逝せられたために僅かにその警咳に接したに過ぎない。磊落豪宕の面影が忘れ難い。接すること短日月であつて強い印象を宿す先生であつた。

山口剛先生は当時はまだ早稲田中学と兼担で、黒い背広に黒の襟ネクタイといつた好顔瀟洒の青年講師であつた。毎週一時間だけ、早中から大学に來られて「徒然草」を讀じて居られた。あの当時の国文学の講義といふものは、いづれおしなべて訓詁註釈が主であつたのだが、山口先生の講義はさういふやうなものではなく、今でいへば文学批評とでもいふのであらう。講義の中に「源氏」や「莊子」が引合に出るのは当然のこと、西行が出、李杜が出、馬琴が出て、連想の糸ははてしなく拡がつて、遂にはベータアの「ルネサンス」にまで繋がつたことを記憶してゐる。

五十嵐先生は、前にも述べた通り、作文と修辭学を主として教へられたのだが、あの頃出版された名著「新文章講話」をテキストに用ゐて、流暢な口調の講義がさながらにあらゆる美しい文章になつて、私たちの心耳をうつとりさ

せた。殊に又、先生は英語の講義をも担当せられたが、テキストにはアストンの「日本文学史」やノールソンの「英文学研究法」などを用ゐられて、英語の講義力をつけると同時に、日本文学との関連にまで説き及ぼされて文学といふものに對する眼を開いて下さつた。

在学当時御恩になつた先生方の想ひ出はさまざまだが、そのことを書いてゐる余裕はない。更にまた漢文を担当された豪い先生方についても書き添える余地も与えられてゐない今の場合としては、畢竟国文学の教えを戴いた先生方に関してのみ要約して申すと、あの当時の私たちは、永井先生からは難解な古典文学を精確に読み取る力を養はれ、五十嵐先生からは国文学を文学として鑑賞する眼を開かれ、山口先生からは文学の比較研究法を実地に授けられたと思ふ。さうして岡田先生には文学研究における科学的分析といつたものを見せられたと私は思つてゐる。いづれ逢ひ難いりつばな先生方に遇ふを得た機縁を有難く思つてゐる。

昭和初年の頃

川 副 國 基

(昭和五年卒)

私が国語漢文科に入つたのは大正の最末年、十五年の春

であつた。まだそここに大震災の惨害のあとがのこつて
いる頃であつた。

口頭試問の折、鞠躬如として呼びだされたのは和服姿の
二人の老先生の前であつた。お二人とも田舎の村長さんと
いつたタイプで、どう見てもこれが大学の先生とは思えな
かつた。そのなかのお一人が、この先生によつて私が四年
間さんざんあぶらをしばられる運命であつたところの、永
井一孝先生であつた。

私共の頃はまだ予科一年本科三年と分かれていた時代で
予科では永井先生、竹野長次先生、伊藤康安先生、岡一男
先生にお教え戴いた。永井先生はたしか兩月物語を講じて
下さつたように思う。精悍なお顔とさびのあるお声と克明
な訓話とが印象深かつた。ほかに文法を「文語口語対照語
法」(吉岡氏)をテキストに御講義下さつた。竹野先生は伊
勢物語の御講義で、次から次へといくらでも引用の歌など
語んじておいでになるのに驚いた。伊勢物語は歌物語とし
て国文学の面白さをよく具現しているの、私は自分が国
文を選んだことを、この御講義を聞いて悔いがないと思つ
た。伊藤先生は修辭の御講義で、お話がうまかつた。が、
何分にもテキストが五十嵐先生の名著「新文章講話」であ
つて、諄々と至れり尽せりの説き方をしたこのテキストで
は、さすがの伊藤先生も御蘊蓄の示めし場がなかつたので
はないかと今では思いかえしている。テキストなどという
ものはどこか問のぬけたところのある方が手頃のようであ

る。岡先生は現代文であつた。恐らく先生が教壇にお立ち
はじめの頃と思われ、およそ教壇人らしくない、捉われな
い、格からはずれた御講義が面白かつた。先生の天皇制へ
の御批判をその頃既に伺つたように思う。

本科一年から三年までの間に私共が御講義や御指導を戴
いたのは、永井先生からは平家物語、鏡もの、古事記、宣
命、祝詞、国語教授演習など、竹野先生からは土佐日記や
枕草子であつた。永井、竹野の両先生は山口剛先生と合わ
せてその頃の国語漢文科の国文関係の主力であられたよう
に思う。

山口先生はその頃、近世文学の研究者として名声とみに
あがつて居られ、私共は先生が国語漢文科の御出身だとい
うこともあつてその御講義に期待していた。本科一年で
近松、二年で文学史と俳諧、三年で文学史を御講義になり
別に支那文学史もお持ち下さつた。文学思潮の展開といつ
た方面について私共は先生の御講義から大きな示唆を受け
た。当時はやつた「赤大根」という言葉をよく使われ、革
命が二、三年うちに来ることをいわれたことを覚えてい
る。

三年ではまた待望の五十嵐先生の源氏物語の御講義を
印象深く聞いた。名調子にみんな陶醉したのである。先生
の御講義の口真似などは今日私などが一番うまいのかもし
れない。当時第一学院長の野々村戒三先生からは本科一年
で能狂言の御講義を聞いた。大きなお体から出る謡いの見

事さぶをお耳にある。

學外からは尾上八郎先生（女高師）と保科孝一先生（高師）がお見えであつた。尾上先生は古今、新古今、万葉の順で本科一、二、三年をお教え下さつた。まるで漫談で私共は大いに不平であつた。今思うとしかしその漫談にも抑すべき滋味があつたようである。保科先生は国語學關係の御講義をお持ちで、一度もお笑いになつたことがなかつた。当時のノートで今でも私の座右にあるのは山口先生の文学史と保科先生の国語学である。佐々木八郎先生の御講義はほんの一年違いで私共には聞く機会がなかつた。

総じて私共の国漢科時代でも、訓詁第一主義の長い伝統を逸脱してはいなかつた。おかげで古典の讀めない国文科生というそしりを受けることからは一応免かれ得たが、文学としての扱い方や批評鑑賞の方面はやや食ひたりなかつた。

時代の險しさは左右学生の対立が中央校庭で血を流がしてゐた。私共は胸に鬱屈したものを感ぜながら、今日、歴史社会学派と呼ばれる研究の仕方は學べなかつた。私共のなかでそれを求める者は自分で考へてみるよりほかなかつた。私個人のことといえば、みだされぬものを求めようとしながら、つまらぬ同人雜誌をやつてみたり、某氏の門下で安易な詩をつくつてみたり、また一方、大学新聞の編集に携わつて思想の激蕩に身を任せたり、まことに支離滅裂であつた。

今でも思ひ出すのは永井先生がある時、珍しく激した声で「小説を書きたいものは文学部へゆくことです」といわれたお言葉であつた。私はそれをまことに意味深く聞いたが、一寸さびしくもあつた。ここにいっても小説を書いてみせる、といつて在学中ずつと小説修業を続け、卒業してから一流雑誌に作品を発表するところまで行つた友人が二人ほどいたが、大成しないまま死んでしまつた。

恩師の思ひ出

小路 一光

（昭和十年卒）

私は昭和六年から十年まで、現在の教育学部と同じ場所にあつた本造二階建の古びた校舎で四ヶ年の学生生活を過ごした。

四ヶ年を通じて、教室で最も接触の多かつたのは、永井・松平・竹野三先生である。従つて私共が三先生から受けた影響や感化は色々な面に於いて一番深く又師範部の一つの學風を代表するものはこの三先生であつたと言つても過言ではないと思う。永井、松平両先生とも、当時既に老齡の域にあられたが、その講義はまさに仕者を凌ぐ發刺さで、熱の籠つた甲高い力強い声は、私共一人一人に迫つて